

# 樹木画テストにおける心理学的サインの妥当性に関する研究

## The Study of the Validity of a Psychological Sign of the Tree Drawing test

文学研究科教育学専攻臨床心理学専修博士前期課程修了

山 崎 信 弘

Nobuhiro Yamazaki

### I. 問題

投射描画テストはいずれも実施が簡便なので臨床場面に広く普及しており、その中でもコッホ (C.Koch) のバウムテストは、病院臨床や学校臨床、司法臨床など各種機関で幅広く用いられている。しかしテストの実施法の簡便さゆえに、単なる印象的解釈に基づいて安易に利用され、コッホの挙げている各項目の判断基準があいまいに捉えられて解釈されるという問題点が一谷・津田<sup>9)</sup> によって指摘された。この問題点を克服する試みとして、各検査者間で共通した基準を持ってバウムを判断するための「バウムテスト整理表」(国吉ら、1982) の作成が行われた。これにより指標採択の判断における共通基準が設定され、バウムテストは「バウムテスト整理表」に従って判断され、採択された項目はコッホの解釈仮説に忠実に従い解釈を行うこと<sup>8)</sup> で誤った評定を避ける試みがなされてきた。

しかし判断基準の問題は解決したものの、続いてコッホの解釈仮説の妥当性に関する批判が研究者から出されるようになる。コッホはバウム解釈にあたって「樹木画テストのための表 (Table for the tree test)」を作成したが、表には一つの指標に数多くの項目の仮説が与えられていた。このことに対して「コッホの表には一つのバウム指標に対して多項目の象徴的解釈が与えられており、特に性格的な指標の一部は、たぶんに思弁的はどうしてそのような解釈が導かれるのか根拠が必ずしも明確でなかったり、コッホがリスト化して示した以外の解釈の可能性が他の心理検査の所見などから示唆されたりする場合がある」<sup>14)</sup> や「コッホのテキストには同じ指標でもまったく違ったあるいは正反対の解釈仮説が記載されていたことから解釈が多義的となり、その分析を困難にしている」<sup>11)</sup> という批判がなされた。同様の問題点は海外の研究者からも早くから指摘されており、アメリカの研究者ボーランダー (K.Bolander) <sup>2)</sup> は「ストロークの交差 (交差した枝)」を例に挙げて、「同じサインがある被験者と別な被験者で正反対に解釈されるのは受け入れがたい」と述べている。しかしこうした批判の一方で、わが国ではコッホの表を用いることで「描画の多義性を強調できる」<sup>6)</sup> として表の多義性そのものを肯定的に評価する研究もあり、コッホの「表」に対する評価は今現在も定まっていないようである。

コッホの解釈仮説に忠実に従ってバウムテストの解釈をすることが奨励されていた日本の研究に対して、フランスの研究（D.カスティエーラ, 1994, 阿部訳, 2002）ではストラ（R.Stora）が膨大な統計的研究を行い、各指標が心理学的に明確な意味を持った、「心理学的サイン」の確定作業が行われた。確定されたサイン仮説は約180項目あり、その後ストラの弟子であるカスティエーラによってストラの心理学的サインの改良がなされた。これらフランスにおける一連の研究は、近年多数邦訳され出版されている（阿部訳, 2002, 2006）。三木（1984）や河合（1994）によって指摘されたコッホの「表」の多義性の問題点を克服する機会となると思われるが、フランスの研究で言及されている数多くの心理学的サインの妥当性に関する研究はわが国ではあまりとりあげられていない。桑原ら（2002）による福岡家庭裁判所の研究で、カスティエーラの夢の木法による非行少年に対する心理アセスメントの有効性に関する研究が行われているが、これは臨床事例研究であって、心理学的サインの統計的妥当性は検証されていない。わが国でも高橋（1986）や愛原（1987）など、独自に心理学的サインの意味を列挙した文献はいくつか存在するが、その解釈の根拠はいずれも経験則に基づくのみで科学的な根拠は示されていない。

本研究では、海外でのバウムテスト研究史の中で描画解釈における心理学的サイン解釈が議論されているのに対し、わが国では「心理学的サイン」としての研究の蓄積が少ない点に注目した。コッホの「表」に基づいた方法は、統計研究も含めてその研究が蓄積されているが、心理学的サイン解釈に関しては臨床経験に基づいたものがほとんどである。大々的な統計的研究によりサインを確定したストラの著書ははまだ翻訳されておらず、わが国でテストとしての信頼性・妥当性を検証した研究を見つけることは出来なかった。よって本研究ではストラ・カスティエーラの心理学的サインの妥当性を検証することを目的とした。比較対象とするサインは、被験者を確保しやすい点から、性格特性の一つである内向性－外向性とした。

## II. 研究

### 1. ストラ・カスティエーラにおける内向－外向の心理学的サインの妥当性

#### (1) 目的

第1研究ではストラ・カスティエーラによるサイン仮説の1つである内向と外向に関して、内向性の強い被験者と外向性の強い被験者との間で、サイン出現率にどのような差が見られるかを調査する。仮説としては、内向のサインは内向群での出現率が多く、外向のサインは外向群で出現率が多いと考えられる。加えてストラ・カスティエーラのその他のサイン仮説に関しても出現率に差が出るか探索的に調査する

#### (2) 方法

目的に沿って、本学の大学生を対象として向性検査とバウムテストを実施した。以下に調査の実施

方法を説明する。

### (3) 対象

創価大学2～4年生を調査対象とした。回答者計104名のうち、無回答、記入漏れ、その他描画の不備を除くと、有効回答数は86名（男性27名、女性59名）であった。

### (4) 検査日

2006年7月25日

### (5) 淡路・岡部式向性検査

内向群と外向群を分類する基準として、淡路・岡部式向性検査（1932年）を集団で実施した。項目に関して、回答における誤解や利便性を考慮し、以下のような表現の修正を行った。

No. 3	修正前	大事を取って実行に暇取りますか
	↓	
	修正後	ものごとを決めるのに時間がかかりますか

淡路・岡部（1932）にならい、質問項目どおりであれば「はい」に○、反対ならば「いいえ」に○をつけさせ、どうしてもきめられない場合は何も記入せずそのままにするように指示した。

### (6) 信頼性の検討

有効回答となった86名のデータに、後日再調査をした本学学生15名分のデータを加え、合計101人の回答を対象として、淡路・岡部式向性検査の外向性尺度と内向性尺度ごとにCronbachの $\alpha$ 係数を求めた。その結果、項目全体で $\alpha = .804$ と高い値が得られた。また内向性尺度でも $\alpha = .795$ と高い値が得られた。外向性尺度は.674とやや低いが、比較的安定した結果を得ることが出来た。これらのことから、淡路・岡部式向性検査は外向性尺度がやや落ちるものの、信頼性を満足させる水準にあると考えられる。

### (7) 描画の実施法及び解釈法

バウムテストは集団で実施、教示はカスティエーラの「夢の木法」の教示を用いた。「夢の木法」はストラが1960年代に考案した、樹木画を4枚連続して描かせる方法を、1980年代にその弟子のカスティエーラが再構成した、樹木画を教示を変えて3枚連続して描かせる変法である。

1枚目－「木を描いてください。どんな木でもかまいません。」

2枚目－「また、木を描いてください。同じ木でもいいし、違う木でもいい」

3枚目－「夢の木を描いてください、つまり最も美しいと思う木、あるいはできるものなら庭に植えたいと思うような木」

『バウムテスト活用マニュアル』より、巻末のサイン一覧表に従い、内向と外向のサインの有無をチェックした。

内向のサインは「茂みの欠如」「茂みの濃い陰影」「完全に閉じられた茂み」「単線の枝」「水平に向き合った枝」「葉の欠如」「丸まっている根元」「閉じられた根元」「根の濃い陰影」「鉢植えの木」の10項目。外向のサインは「外に向かって広がった樹冠」「豊かな茂み」「物騒とした、ボリュームのある、誇張された茂み」「太く大きな幹」「樹冠部や木の周囲の様々な事物」の6項目である。

## (8) 統計処理方法

検査結果を元に、男女別に向性指数段階基準表に基づき、「外向」「標準」「内向」の3段階に分類した。なお「超外向」と「超内向」はそれぞれ1名ずつ（1%）となったので、「外向群」「内向群」にそれぞれ含むこととした。結果は以下のとおりである。このうち、内向型とも外向型とも決められない標準型（淡路・岡部, 1932）21名は本研究の検定対象から除外した。

したがって、本研究での有効サンプル数は外向群42名・内向群23名の合計65名となる。その結果を表2に示した。

表1 分析対象の内訳

対象	本学に在籍する学生	計65名
性別	男性	22名 (34%)
	女性	43名 (66%)
学年	1年生	0名 (0%)
	2年生	44名 (68%)
	3年生	9名 (14%)
	4年生	12名 (18%)
向性	内向群	23名 (35%)
	平均得点	81点
	外向群	42名 (65%)
	平均得点	135点

次に、これらの結果を元に、内向群と外向群の間で、サイン出現率をもとめ、さらに $\chi^2$ 値を求めた。クロス周辺度数に10以下の小さな値があるときは、Fisherの直接法による修正を行った。これは田中・山際<sup>17)</sup>が「 $2 \times 2$ 表において観測度数が10以下のセルが1つでも存在する場合は $\chi^2$ 検定でなく直接確率計算法を用いること」を推奨しているためである。

## 2. 結果

### (1) ストラ・カスティーラの内向と外向サインの群別出現率

ストラ・カスティーラの内向と外向サインの群別出現率と $\chi^2$ 値の結果（3枚総計のみ）を表2に示した。

1 枚目では内向のサインに関して「完全に閉じられた茂み（内向群での出現率30%）」以外は総じて出現率10%以下と低かった。有意傾向の見られた項目はなかった。

2 枚目では内向のサインに関して、やはり「完全に閉じられた茂み（内向群での出現率39%）」と高かったが統計的な有意差はなかった。「茂みの欠如」に関して5%水準で有意な差 ( $\chi^2 = 4.716$   $p < .05$ ) が見られた。外向のサインに関しては「太く大きな幹」が10%水準で有意な差 ( $\chi^2 = 2.973$   $p < .10$ ) が見られた。

3 枚目では有意傾向の見られた項目はなかったが「太く大きい幹」と「樹冠や木の周りの事物」に関して内向群の出現率が外向群よりも高かった。

3 枚全てを合わせた場合、内向のサインに関して「茂みの欠如 ( $\chi^2 = 6.995$   $p < .01$ )」「完全に閉じられた茂み ( $\chi^2 = 8.243$   $p < .01$ )」で1%水準で有意差が見られた。また「水平に向き合った枝 ( $\chi^2 = 4.126$   $p < .10$ )」に10%水準で有意な傾向がみられ、「小さな木 ( $\chi^2 = 4.873$   $P < .05$ )」に5%水準で有意差が見られた。

表2 ストラークスティーラ 心理学的サイン 内向・外向 総計 出現率

内向のサインとされる描画の特徴

		内向サインの群別出現率			
		内向群 (69)	外向群 (196)	$\chi^2$ 値	Fisherの直接法
茂み	茂みの欠如	10 (14%)	5 (3%)	6.995***	
	茂みの濃い陰影	8 (12%)	12 (10%)	0.208	
	完全に閉じられた茂み	24 (35%)	21 (17%)	8.243***	
枝	単線の枝	2 (3%)	0 (0%)	3.69	
	水平に向き合った枝	5 (7%)	2 (2%)	4.126*	0.099
葉	葉の欠如	3 (4%)	1 (1%)	2.803	
根元	丸まった根元	4 (6%)	4 (3%)	0.779	
	閉じられた根元	18 (26%)	24 (12%)	1.807	
	根の濃い陰影	2 (3%)	2 (2%)	0.382	
付属物	鉢植えの木	0	2 (2%)	1.107	
大きさ	小さな木	12 (17%)	9 (7%)	4.873**	

外向のサインとされる描画の特徴

		外向サインの群別出現率			
		内向群 (69)	外向群 (196)	$\chi^2$ 値	Fisherの直接法
幹	太く大きな幹	35 (51%)	68 (54%)	0.188	
付属物	樹冠部や木の周囲の様々な事物	29 (42%)	51 (40%)	0.044	

\* $p < .10$  \*\* $p < .05$  \*\*\* $p < .01$

\* 1  $\chi^2$ 乗検定で10%水準にも至らなかった場合、Fisherの修正法のP値は省略した

## (2) ストラ・カスティーラのその他のサイン項目の群別出現率

ストラ・カスティーラの内向-外向以外の心理学的サイン55項目に関しては、探索的にサイン出現率の $\chi^2$ 値を求めたが、出現率に差のある項目はなかった。

### 3. 考察

#### (1) 内向のサイン

内向のサイン10項目に関して個別に結果の概略を示し、検討を行う。

内向のサイン「完全に閉じられた茂み」に関しては、描画3枚平均して33%の出現率で3枚総合で1%水準で有意差がみられた。コッホ<sup>12)</sup>によると、樹冠の線は外側部の環境との接触地帯(対人関係)を表すものと考えられている。出現率も内向群で3割以上の被験者に見られることから、周囲の環境よりも内的世界に関心の向くことが多い内向型を表すサインとして有効と思われる。ただし外向群にもサインの出現率が高かったため、査定の際に単独で判断基準とできるかどうかについては注意が必要となる。

樹冠に関連して、「茂みの欠如」には2枚目と3枚総計で有意差が見られた。環境との接触地帯である樹冠が欠如しているということは、対人関係上での困難さが推測されるものであり、また外向群での出現率が低かったことから内向のサインとして有効と思われる。

また、木の大きさに関連して、「小さな木」において、3枚総計で有意差が見られた。ポーランダー<sup>3)</sup>によれば、「小さな木」は「自分が重要でないと言う感情や広大な世界によって圧倒された自己、自己や自分の業績への極端な不満足感をもつことを示唆する」といわれる。これも外向群では出現率が低く、内向のサインとして有効と思われる。

枝に関連して、「水平に向き合った枝」では3枚総計で10%水準で有意傾向がみられた。前村・小村(1986)、三木ら(1984)の報告では「水平に向き合った枝」と同じ形態のサインである「直交枝」には社会的外向性低群との間には有意差が見られていない。内向のサインとして有効といえるかどうかは、今後データの蓄積を基に更なる検討が必要である。

「鉢植えの木」は内向のサインとされているものの内向群での出現が0%であった。今回の研究からは、このサインは内向のサインとしては妥当性が低いと考えられる。また「丸まった根元」「根の濃い陰影」「茂みの濃い陰影」は外向群との出現率がほぼ同じで、同様に妥当性が低いものと考えられる。「単線の枝」は内向群での出現率の方が高かったものの、内向群との間で有意に差がみられるほどではなかった。

注目すべき結果としては、外向のサインとされる「太く大きな幹」「樹冠や木の周りの事物」に関して、3枚目の描画で内向群が外向群の出現率を上回る傾向が顕著に見られた。

3枚目での外向のサイン出現率

「太く大きな幹」…内向群13例(57%) / 外向群18例(42%)

「樹冠や木の周りの事物」…内向群18例(78%) / 外向群17例(40%)

特に「樹冠や木の周りの事物」では有意差こそ出なかったものの、1枚目・2枚目（共に内向群での出現率6例/26%）に比べて3倍の出現率の増加が見られた。この外向サインの反転現象は、2つの文脈で理解することが可能である。

まず共通の前提として、カスティーラの夢の木において、3枚目の木は「空想、欲求、願望」を表現する「夢の木」といわれている。石川<sup>7)</sup>は児童養護施設入所児童へ夢の木法を実施した結果から、「夢の木には願望が単純に投射されるのではなく、被験者が現実には抱えている問題や葛藤が、想像や空想といった非現実的な方法であらわされることがあり、1枚目や2枚目の時点では描きあわせえない心理的内界が、3枚目の教示を受けることで精神的に開放され、始めて無意識の部分に抱えている葛藤や混乱がファンタジーの姿を借りて表現されるのではないだろうか」と考察している。この考察から、夢の木には単純な欲求・願望のほかにも、無意識の葛藤など深層に位置する心理が投射される可能性が示唆されているといえる。このような夢の木の特徴を前提として、今回の結果に考察を加えたい。

1点目としては、もともと豊かな内的世界が投射されたという文脈での理解が可能である。夢の木は「こんな木があったら良いなと思う木、好きな木」を自由に描いてもらうという開放的な状況の中で表現される。石川は1枚目で見せた表面的な自己像、2枚目で見せた内的自己、すべてをひっくり返して統合させたものが3枚目に如実に現れると分析している。外向サインの反転現象は、テスト場面になれ、自由度の高い夢の木の教示を与えたことにより、自分の中に閉じこもりがちだが内面生活は豊かなこともある<sup>10)</sup>という内向型の豊かな内的世界が、ファンタジーの姿を借りて夢の木に投射されたものと解釈することができる。

2点目としては、補償的構造の投射という文脈でも理解ができる。補償とはアドラー (A.Adler) が重視した適応機制のひとつで、身体的・性格的な劣等感に基づいて劣等感が生じた場合に、劣等感のもとになっている欠陥そのものを克服する、あるいは空想や白昼夢などに逃避するといった形で承認や優越への欲求の代償的な充足を図るといった心理的機能である<sup>15)</sup>。レボヴィッツ<sup>13)</sup>は「パーソナリティの弱さを埋め合わせることで自己を機能的に修復する」というコフト (H.Kohut) の補償的構造理論を引用し、「構造的に描画の特徴を吟味することで、検査者は、この一時的欠損の心象や臨床像と、その個人が自己再建にいたるまでに成長した防衛的補償的二次構造を知ることができる」と述べているが、この外向サインの反転現象は、このような補償の文脈でも理解することができる。つまり、内向性の向性が強い被験者が、外向性の特徴である優れた社交性などを得たいという欲求を持っていた場合、夢の木にその補償的構造が投射されたことで外向のサインが増えたと考えることができる。

本研究では被験者の個人情報ほとんど入手していないため、上記2点の考察はあくまで推測の域を出るものではないが、今後半構造化面接などを持ちいることでこの点に関する研究の余地を残すものといえる。

全体としては、内向のサインは内向群で出現率が高く、外向群で出現率が低い傾向があり、有意差

の出た項目も多いため、ストラ・カスティーラのサイン仮説の妥当性がある程度認められたと考えられる。特に樹冠に関するサインに関しては、「樹冠の外側部は、自分が印象をどのように受け取り、自分をどのように外に表現するかを示す」<sup>12)</sup> や「人間関係（家族、親しい人々、社会的な関係）への意識された態度と、環境全体との関係の構えが表現される」<sup>7)</sup> と多くの研究者によって、対人関係のあり方が樹冠部分の描き方に象徴されることが示されている。このように、木の象徴性という視点から考察した場合にも、樹冠に関連するサインの理論が統計的にもその妥当性が確認されたと言える。

## （2）外向のサイン

外向のサインに関しては、まず第一に「外に向かって広がった枝」「豊かな茂み」「鬱蒼とした、ボリュームのある・誇張された茂み」の3項目に明確な判断基準がないことが問題点となった。基準がないために、判断に当たっては検査者の主観によりサインの有無の判定をすることになる。判断基準を明確にすることが必要となる。

サインの検証を行った2項目に関しては、「太く大きな幹」では2枚目で10%水準で有意な傾向が見られた。しかし「太く大きな幹」は内向群においても高い出現率がみられ、このサイン単独で内向・外向の区別が出来ないと思われる。「樹冠部や木の周囲のさまざまな事物」に関しては内向郡との出現率がほとんど変わらず、特に3枚目では内向群の出現率のほうが高いという結果であり、外向のサインとしての妥当性は低いと考えられる。

## （3）その他のサイン

内向と外向のサイン以外で、出現率に統計的有意差が見られるかどうかに関しても検定を行ったが、有意差の出た項目はなかった。

YG性格検査とコッホの表との比較をした先行研究<sup>14)</sup> では、他の仮説が付された項目に有意差が見られることが多々あり、疑問点として上げられることが多かったが、ストラ・カスティーラの場合は、内向－外向以外の心理学的サイン55項目で出現率に有意差の見られた項目は一つもなかった。このことはストラがバウムのサイン確定作業の中で、統計処理を行って心理学的サインを練り上げていき、サインとして洗練した形に収斂していったことを裏づける結果と考えられる。

また、有意差の出なかった項目に関しては、ストラが心理学的サイン確定作業の中で、臨床的経験からの知見と統計的研究からの知見の両方を用いてサインを練り上げていったことが関係していることも影響しているかもしれない。今回有意差の出なかった項目も、樹木画全体の文脈の中でサインとしての意味をもっていたり、臨床的に見た場合に意味のあるサインとして影響する可能性が示唆される。

以上、第1研究ではストラ・カスティーラのサインのうち内向と外向のサインに統計的な妥当性があるかどうかを研究した。また確認的に他の仮説が付された心理学的サイン55項目に関しても群別で差が出るか調べた。結果からは以下の4点の特徴が挙げられる



- ① 内向のサインは内向群で出現率が高く、外向群で出現率が低い傾向があり、有意差の出た項目も多いためストラ・カスティーラの仮説の妥当性がある程度認められた。
- ② 外向のサインに関しては判断の基準となる枠組みが必要な項目がある。「太く大きな幹」に関しては、「バウムテスト整理表」(国吉.1980)の基準(指3本分以上)をもちいて判断した。検討を行ったサインに関しては、内向群と外向群とで出現率に顕著な差が見られなかったことから、その妥当性は認められなかった。
- ③ 3枚目の描画で、外向のサインが外向群より内向群に多く見られる傾向があった。ストラ・カスティーラの3枚法(夢の木法)の仮説では、3枚目の木(夢の木)は「空想・欲求」を投射するといわれている。内向型の内的世界の特徴として、自分の中に閉じこもりがちだが内面生活は豊かなこともある<sup>9)</sup>といわれるが、そのような豊かな内的世界が、教示の変化と描画場面への慣れなどの要因によって投射されやすくなり、外向のサインの形をとって表現された可能性が考えられる。また補償構造の投射という文脈では、内向性の向性が強い被験者が、外向性の特徴である優れた社交性などを得たいという気持ちや葛藤を持っていた場合、夢の木にその補償的構造が投射されたと考えることができる。
- ④ 内向-外向以外の心理学的サイン55項目に関しては、出現率に有意差の見られた項目は一つもなかった。このことはストラが統計処理を行って心理学的サインを練り上げていき、サインとして洗練した形に収斂していったことを確認できた。

### Ⅲ. 全体的考察

#### 4. 内向と外向の定義 向性検査との関係

向性検査は性格特性の一つである向性を測定することを目的としている。そもそも向性とは、ユング(Jung,C.G.)が提唱した概念である外向性(extraversion)と内向性(introversion)という性格類型説的な分類に由来するものである。もともと内向という語は、ユング(1910)において『子供の心の葛藤について』で初めて表され、性的リビドーの内向を意味した。しかしJungはフロイト的なリビドー概念をより拡大させ、内向と言う概念そのものを変化させ、内向は全て病的であるという立場を捨て、リビドーあるいは心的エネルギーが外向き、すなわち他者やものなど客体にむけられていることを外向とよび、知覚・思考・感情・行為などが客体によって直接的に決定されるとした。一方、リビドーが内向き、自分自身の意識経験に向けられているのが内向であり、内向型の人は知覚・思考・感情・行為などが主体、すなわち主観的要因によって決定されると考えた。<sup>10)</sup>

「向性」に関する概念に関しては上記の歴史的背景があるが、向性検査で見ている向性は、ユングの最初の仮説である基本的な心理学的類型というよりも、分布が正規的である、なんらかの連続変数

の極にすぎない性格特性としての向性を見ている。わが国では日本人向きの向性検査表である淡路・岡部式向性検査表(1932)があり、本研究でも淡路・岡部式を使用した。これらの検査は個人の向性を数量的にとらえ、その数値を向性指数version quotient (VQ) による表した。向性指数が高いと外向性、低いと内向性を示す。それが極端に高いと超外向性、低いと超内向性となり、性格にやや問題があることをうかがわせる。多くの人は外向性とも内向性ともはっきり決められない両向性である。<sup>10)</sup>

淡路・岡部<sup>1)</sup>の理論によれば、外向性傾向の特色は、情緒の表出が自由旺盛で、なにかという感情的で喜怒哀楽の情によって動かされ、しかも気分の流動が早く、快活で諦めが良く、些細のことは拘泥しないで、天真爛漫に振舞う。それだけに時として感情にかられて無反省に盲動し、かんしゃくを起こして短気に振る舞い、取り返しのつかない失策を演じて心から悔いることがない。他人に対しては社会的開放的で、人と共にあることに喜びを感じ、誰とでも分け隔てなく交際し、世渡り上手で如歳が無く、任侠心が強く世話好きで、気軽であつて雅量に富む。また概して派手好きでにぎやかなことを愛し」とある。

一方で内向性傾向の特色は、「情緒の表出がかなり控えめで、しかも余韻が残存して容易にほかには移行行かぬ点にある。この傾向は内気で陰気な人々に見られるところである。この傾向の強い人々は喜怒哀楽をほとんど面に表さず、これを胸にたたみ感情がむしろ内にとぐるをまく。一般に独居して沈黙考することを好み、冷静で思慮深いがそれだけに実行力に乏しいきらいがある。しかしもっぱら何事かをはじめると、粘り強く根気よくおわりまで隠忍自重し、また一度何かを思い込むと、執念深くて用意に考を翻さない。従つてわるくすれば意固地になり、頑迷になり、剛情になり、冷酷になる。一般に羞恥が強く、人つきが悪く、他人と仕事を共にしたり、喜びや悲しみを分かつことができない。しかし軽率や無分別やまたは軽薄なところがなく、何時までも謹厳重厚で質実誠直である点に長所がある。内向性人物の思想は概して理知的で、論理的分析を好み、徹底を求めて理屈っぽく」とある。

理論的には外向性のみを有する純外向人なるものもなければ、内向性のみを有する純外向人というものもなく、外向性と内向性はだれにでも存在する二大傾向で、人ごとに割合が異なるということになる。

一方でカスティエラ<sup>5)</sup>の内向-外向概念では、内向とは「自分の中に閉じこもること。内向型の人は周囲の環境に関心を向けず、内的世界にすべての満足を求める傾向にある。対人接触の困難さは内向を特徴付けられる。打ち解けた関係を避けたり恐れたりするが、内面的な生活は豊かなこともある。」と説明されている。一方外向は「感情を外面に表す傾向。外向型の人は社会的で多くの友人を持ち、他人との感情的および知的交流を求める。人間関係がたとえ表面的になつても、外向は人間関係に役立っている」とある。

カスティエラと淡路・岡部の理論を比較すると、カスティエラ<sup>5)</sup>の概念が対人関係上の特徴を中心に

しているのに対し、淡路・岡部は対人関係に加えて情緒的安定感といった特性が加味されているように思われる。

向性検査を用いる意義としては、対象となる特性が内向性と外向性という2因子の単純構造でシンプルな点を考慮して用いた。

## 5. 考察

バウムテストの解釈に関する問題点としては、コッホの「表」における解釈の多義性と妥当性の問題がある。わが国の研究史においてはコッホの方法論が重視されているものの、表と解釈仮説の問題点が解決されていないままであり、心理学的サインの有効性に関しては、研究がほとんどなされていないというのが現状であった。心理学的サインの研究がすすんでいるフランスの知見は、桑原(2002)によりカスティエーラの夢の木法の臨床事例研究が報告されているのみでその有効性はわが国では未確定であった。本研究の問題意識は、描画解釈の方法論の違いに関する議論の中でわが国で心理学的サインとしての研究が少ない点に端を発している。

よって本研究ではストラ・カスティエーラの心理学的サインのうち内向と外向のサインの妥当性を検証することを目的とした。本章ではその結果を踏まえ、以下の2点について理論的な位置づけを行う。

現在わが国での最新の研究体系ともいえる『バウムの心理臨床』(山中ら、2005)では、コッホの表の多義性を有効に生かしていく方法として、直観と臨床経験によるバウム解釈を重視している<sup>16)</sup>。心理学的サインの研究が進んだフランスやアメリカと対比すると、わが国独自の方法とも取れるが、むしろコッホの師であるユッカーの方法に立ち返ったとも言える。ストラ・カスティエーラの心理学的サインに関しては、ストラがロールシャッハテストを用いて統計的に妥当性を検討した量的分析の流れがあり、わが国でも臨床場面での有効性が指摘(桑原2002、石川2005)されていたものの、統計処理をした妥当性の研究は行われていなかった。そのためテストとしての妥当性がどの程度あるのか不明確であったため今回検証を行い、結果としてストラ・カスティエーラの心理学的サインの妥当性がある程度認められた。

内向のサインは内向群で出現率が高く、外向群で出現率が低い傾向があり、有意差の出た項目も多いためストラ・カスティエーラの仮説の妥当性がある程度認められた。特に「人間関係(家族、親しい人々、社会的な関係)への意識された態度と、環境全体との関係への構えが表現される」<sup>4)</sup>とされる木の樹冠に関係するサインで有意な結果がみられたことなどは、バウムテストで描かれる木の象徴性という面から見てもストラ・カスティエーラのサイン項目が合理的な内容になっていることを確認できた。

一方で、有意差の見られた項目は多数あったものの、単独で内向性の強い被験者を判別できるようなサインは見られなかった。この結果から、描画により査定を行う際には一つのサインだけをみて内

向かどうかを判断するのではなく、木の全体性との関連や、他のサインとの比較による検討が必要であることが示唆された。

外向のサインに関しては判断の基準となる枠組みが必要な項目がある。検討を行ったサインに関しては、内向群と外向群とで出現率に顕著な差が見られなかったことから、その妥当性は十分に認められなかった。また、3枚目の描画で、外向のサインが外向群より内向群に多く見られる傾向があった。ストラ・カスティーラの3枚法（夢の木法）の仮説では、3枚目の木（夢の木）は「空想・欲求」を投射するといわれている。内向型の内的世界の特徴として、自分の中に閉じこもりがちだが内面生活は豊かなこともある<sup>5)</sup>といわれるが、そのような豊かな内的世界が、教示の変化と描画場面への慣れなどの要因によって投射されやすくなり、外向のサインの形をとって表現された可能性が考えられる。また、レボヴィッツ<sup>13)</sup>が「構造的に描画の特徴を吟味することで、検査者は、この一時的欠損の心象や臨床像と、その個人が自己再建にいたるまでに成長した防衛的補償的二次構造を知ることができる」と述べたように、内向性の向性が強い被験者が、外向性の特徴である優れた社交性などを得たいという気持ちを持っていた場合、夢の木にその補償的構造が投射されたことで外向のサインが増加したと考えることも可能である。内向－外向以外の心理学的サイン55項目に関しては、出現率に有意差の見られた項目は一つもなかった。この結果によりストラが統計処理を行って心理学的サインを練り上げていき、サインとして洗練した形に収斂していったことを確認できた。

本研究では本学学生を被験者とし、サンプル数も100以下と少ないため、本研究の結果を即座に一般化することはできないが、いままで研究されていなかったストラ・カスティーラの心理学的サインの検討が出来たことにより、バウムテストの発展に有効な示唆の富む結果を得ることが出来たと思われる。

## 6. 結論

本研究ではストラ・カスティーラの内向のサインと外向のサインの妥当性の研究を行った。淡路・岡部式向性検査を実施し、内向性の強い群と外向性の強い群を弁別した後に各群におけるサインの出現率を求めた。その結果、ストラ・カスティーラのサインは内向サインで妥当性が確認できた項目が多数見られた。加えて、3枚目の描画（夢の木）で内向群に外向サインが多く出現する「外向サインの反転現象」が見られたことから夢の木法が被験者の内的世界を重層的に理解することができるという有効性を確認できた。

今回の研究の反省点と今後の課題としては、まずサンプル数が全65ケースと少なかった点と、被験者が本学の教育学部の学生が中心であることから、サンプルの属性の偏りが上げられる。そのため、先にも言及したが、本研究の結果を持って、即座にストラ・カスティーラのサインの妥当性が一般化されるわけではない。今後サンプル数を増やし、幅広い年齢層の調査をすることでその妥当性を確認していく作業が引き続き必要である。



## 引用文献

- 1) 淡路田治朗・岡部弥太郎：向性検査と向性指数（上）. 心理学研究 第7巻 第1号, P2~P10, 1932
- 2) Bolander, K : Assessing Personality Through Tree Drawings. Basic Books, 1977. (高橋依子訳：樹木画によるパーソナリティの理解. p40-47, ナカニシヤ出版, 京都, 1999
- 3) 同書, p90
- 4) 同書, p159
- 5) de カステイーラa, D : Le test de l'arbre:Relation humaines et problems actuels. Masson, Paris, 1995.  
(阿部恵一郎訳：バウムテスト活用マニュアルー精神症状と問題行動の評価. p40~50, 金剛出版, 東京, 2002
- 6) 藤掛明：描画テスト・描画療法入門. p162~164, 金剛出版, 東京, 1999
- 7) 石川光江：バウムテスト三枚法の有効性～一枚法との比較から～. p 43, 創価大学大学院修士論文, 2005
- 8) 林勝造・国吉政一・一谷彊：バウムテスト事例解釈法. p 3, 日本文化科学社, 1980
- 9) 一谷彊・津田浩一：バウムテスト整理表の作成とその具体的利用. 京都大学紀要 Ser. A, No.61, P1-22. 1982
- 10) 氏原寛・成田善弘・山中康裕・亀口憲治・東山鉦之（編）：心理臨床大辞典（第2版）. p 504-506, 培風館, 2004
- 11) 河合弘靖 徳永佳次 宇田康子：矯正施設におけるバウム・テストの活用について（1）バウムテストを読む. 犯罪心理学研究 第32巻 第2号, p35-39, 1994
- 12) コッホ, K: The Tree test: The tree-drawing test as an aid in psychodiagnosis. 2<sup>nd</sup> ed., Hanx Huber, Bern u. stuttgart, 1952 (林勝造訳：バウムテストー樹木画による人格診断法. p117 日本文化科学社, 東京, 1970
- 13) Marvin Leibowitz : Interpreting Projective Drawings : A Self Psychology Approach, Brunner-Mazel, 1999  
(菊池道子・溝口純二訳：投映描画法の解釈. p34~35, 誠信書房, 東京, 2002)
- 14) 三木芳美・藤沢洋子・首藤直史・藤田裕史：バウムテストの妥当性に関する一考察ーYG性格検査のとの関連でー. 大阪教育大学障害児教育研究紀要 第7号, p49-59, 1984
- 15) 中島義明ほか（編集）：心理学辞典. p 798, 有斐閣. 東京. 1999
- 16) 奥田亮（2005）. 山中康裕・皆藤章・角野善宏（編）：バウムの心理臨床. p44-45, 創元社, 2005
- 17) 田中敏・山際勇一郎：ユーザーのための教育・心理統計と実験計画法 方法の理解から論文の書き方まで 教育出版, 1992

## 参考文献

- 愛原由子：子供の潜在脳力を知るバウムテストの秘密. 青春出版社 1987
- 青木健次：投影描画法の基礎的研究（第1報）ー再検査信頼性ー. 心理学研究 第51巻 第1号, 1980
- Ave-Lallemant, U : Baum-Test. Ernst Reinhardt Verlag, Muchen, 1994 (渡辺直樹・野口克己・坂本堯訳：バウムテストー自己を語る木：その解釈と診断. 川島書店, 2002
- Eka Roivainen and Piritta Ruuska ; The Use of Projective Drawings to Assess Alexithymia : The Validity of the Wartegg Test , European Journal of Psychological Assessment ; Vol.21(3) 2005
- 深田尚彦：幼児の樹木画の発達的研究. 心理学研究 5, P34-36. 1957
- Goldine C.Cleser: Book Review; Charles Koch. The Tree Test. New York:Grune and Stratton, 1952, Washington University Scool of Medicine, 1954
- Jean-Pierre Klein, L'art-therapie ; Presses Universitaires de France, Paris, 2002 (阿部恵一郎・高江洲義英訳：芸術療法入門, 白水社, 東京, 2004
- 林勝造・一谷彊：バウムテストの臨床的研究. 日本文化科学社, 東京, 1973
- 林勝造・国吉政一・一谷彊：バウムテスト事例解釈法. 日本文化科学社, 東京, 1980
- 一谷彊（編）：バウムテストの基礎的研究. 風間書房, 1985
- 一谷彊・津田浩一：バウムテスト整理表の作成とその具体的利用. 京都大学紀要 Ser. A, No.61, 1-22. 1982

- 伊藤隆二・松原達哉（編）：心理テスト法入門．日本文化科学社，東京，1991
- 桑原尚佐ほか：少年事件における心理アセスメント－夢の木法を中心として．調研紀要，第77号，2003
- Lydia Fernandez: Le test de L'arbre Un dessin pour comprendre et interpreter. Collection Psych-Pocket, Editions in Press,2005（阿部恵一郎訳：樹木画テストの読み方・性格と解釈．金剛出版，2006
- 前村賢一・小林欣司：聾児が描いた樹木画に見る発達指標とYG性格検査について．横浜国立大学教育紀要，第26号，1986
- 松井豊：心理学論文の書き方．河出書房，2006
- 松尾太加志・中村知靖：誰も教えてくれなかった因子分析．北大路出版，京都，2002
- 三船直子・倉田ヨシヤ：バウムテスト2回施行法－試論I．大阪市立大学生生活科学部紀要・第40巻，1992
- 中島ナオミ：わが国におけるバウムテストの教示．臨床描画研究 vol.17 北大路書房，京都，2002
- 中島ナオミ：『バウムテスト 樹木画による人格診断法』の問題点．臨床描画研究 vol.21 北大路書房，京都，2006
- 大平典明：樹木画テストの不安指標．静岡大学教育学部研究報告（人文・社会科学編）第40号，1989
- 大平典明：樹木画テストの状態不安指標．静岡大学教育学部研究報告（人文・社会科学編）第48号，171-182，1997
- 小塩真司：研究事例で学ぶSPSSとAmosによる心理・調査データ解析．東京図書，2005
- 奥田亮：書評 バウムテスト活用マニュアルー精神症状と問題行動の評価．精神療法，第28巻第5号，2002
- 大森健一：芸術療法と表現病理学．精神療法 第11巻第6号 金剛出版，東京，2005
- 下山晴彦・丹野義彦（編）：講座臨床心理学2 臨床心理学研究，東京大学出版会，東京，2001
- 高橋雅春・高橋依子：樹木画テスト．文教書院，東京，1986
- 田中敏：実践心理データ解析．新曜社，1996
- Thomas, G.V. & Jolley, R.P ; Drawing conclusions : A re-examination of empirical and conceptual bases for psychological evaluations of children from their drawings. British Journal of Clinical Psychology, 37, 1998
- 辻岡美延：新性格検査法．日本心理テスト研究所，大阪，2000